

*レプソルド子午儀の重要文化財指定書 届く

アーカイブ室新聞第500号(2011年6月16日)に「レプソルド子午儀が平成23年度の国の重要文化財に指定」という記事を書いた。筆者は、20数年にわたって取り組んだ大型光学赤外線望遠鏡「すばる」の建設に引き続き、開発に参加していたSolar-Bが打ち上げ成功で「ひので」と命名された時点で国立天文台を去るつもりであった。しかし、その後、国立天文台天文情報センターに広報普及員として残った。その時点からそれまでの前を向いた先端科学を駆使した観測装置の開発研究から後ろを振り返って国立天文台に残された歴史的に貴重な観測装置、測定装置、資料等をあさる仕事に没頭するようになった。そしてこの仕事にのめり込んだ原因になったというか、第1弾の仕事がこのレプソルド子午儀(写真1)の発見であった。



写真1 レプソルド子午儀

レプソルド子午儀については、何度かアーカイブ室新聞に書いてきた。1880年にドイツ・ハンブルグのレプソルド社で製作され、1881年明治政府の海軍省観測台が購入し、東京大学東京天文台(国立天文台の前身)に移管されたもので、海軍省観象台があった東京天文

台が置かれた麻布の地で観測に供され、日本の時刻の決定、経度の決定に使われていた。関東大震災の難を逃れ三鷹の東京天文台に移され、恒星の位置観測に使われた 130 歳の望遠鏡である。この望遠鏡が平成 23 年度に国の重要文化財に指定された歴史資料部 4 点のうちの一つとなったのである。国立天文台最初の重要文化財、三鷹市にとっても最初の国の重要文化財である。

このたび、その指定書（写真 2）が筆者の手元に届いた。

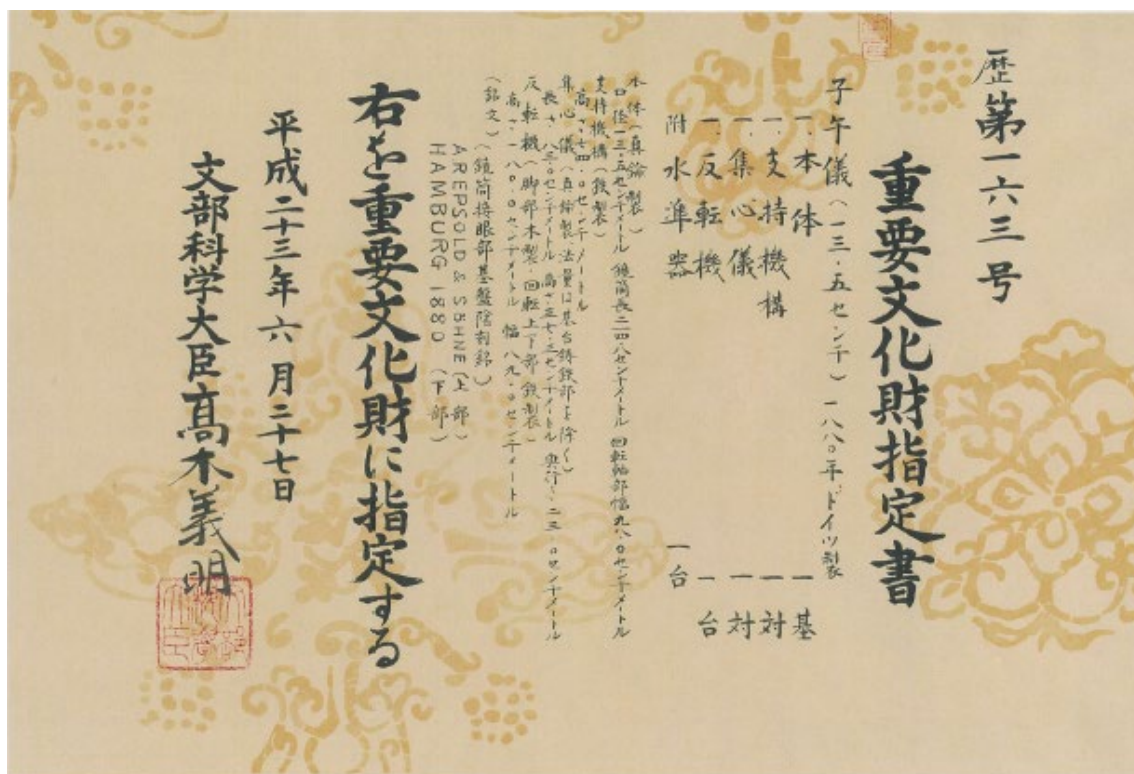


写真 2 重要文化財の指定書

重要文化財の申請は、三鷹市教育委員会、東京都教育委員会、文化庁へと進み、文化庁の審査を経て 3 年をかけて重要文化財に指定された。文化庁からこのレプソルド子午儀の所有者と聞かれ、国立天文台財務課に尋ねたところ、国立天文台は自然科学研究機構を構成している 5 研究所の 1 機関であるから、所有者は自然科学研究機構になるという。自然科学研究機構の本部は東京都港区にある。

この重要文化財の指定書は港区郷土資料館から国立天文台あてに郵送されてきた。筆者としては戸惑ったが、これがお役所なのだと納得した次第である。

これらアーカイブ室新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp